



鶏 鳴

〒221-0864

横浜市神奈川区菅田町2851

(電話 045-473-7191)

聖書の言葉

「主なる神は、土(アダマ)の塵^{ちり}で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった」

聖書(創世記2章7節)

牧師 河合裕志

「神は、土の塵で人を形づくり」とまず記されている。土はヘブライ語でアダマ、それから形づくったのでアダムと言われる。普通アダムと言うと男性のアダムと思うけれどここでは「人」ということ。女性も含まれる。

人が土から作られているということはホントと言わなければ。やがて私達はその時がくれば死んで葬られる。そして土となって行く。今日は大体が火葬にして骨壺におさめられる。この場合には土に化すまで相当の年数がかかる。それでも最終的には土となるだろう。

やがては土になる人間、そこにはどんな意味合があるのだろう。①人間ははかない存在だなあ、限りある存在だなあ、ということ。人間はズット、この地上に生きる訳には行かない。どんな偉い人も最後は土になる。②人間は壊れやすい存在だなあ、ということ。まさに「土の器」(第2コリント4章7節)。事故にあって壊れる。人間関係において心が壊れる。

さて当初土から作られた人が、単に人形ではなく人間になるのは神が「その鼻に命の息を吹き入れられた」ことによる。ニシュマツト・ハイム(命ハイムの息)をフーと吹きこんだので人は「生きる者」(ネフェシュ・ハヤー)となる。心臓も肺

も動き出し、目もパチパチと。

これは何を物語る? 人間ははかない存在だけれど、その内に神の息を吹きこまれた尊い存在だ、ということでは? 神の息は神の霊と言ってはいけないか。「塵は元の大地に帰り、霊は与え主である神に帰る」とある(コヘレトの言葉12章7節)。イエスの最後をルカはこう記す。

「『父よ、わたしの霊を御手にゆだねます』、こう言って息を引き取られた」(23章46節)。人には神の息・霊が宿っていて死亡の際には肉体は土に、霊は神の元に帰る、と言われている。この思いで死を迎えられれば誠に幸い。

それから次の興味深い記事がある。死より復活したイエスが弟子達に「息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい』」(ヨハネ20章22節)。イエスも息を吹きかけている。それは聖霊という息。これはどういうこと? このあとイエスは昇天し、父なる神の右に座するに至るのだけれど、地上にある私達には聖霊として一緒にいてくれるよ、ということ。肉眼にはもはやイエスは見えないのだけれど聖霊として今、ここに、私と共に歩んでくれている、これはまた誠に幸いなことでは?

集集会案内

日曜礼拝：午前10時15分、日曜夕拝：午後6時

子どもの教会：日曜日午前9時

中高青年会：日曜日礼拝後

聖書を学び祈る会：水曜日午前10時

牧師面談：水曜日午後1時~7時